

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520536

研究課題名(和文) 早期日英バイリンガルの14年間縦断データのナラティブ分析研究

研究課題名(英文) A 14-year longitudinal study on narrative development in an early Japanese-English bilingual

研究代表者

田浦 アマンダ (Taura, Amanda)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60388642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：対象バイリンガル兄妹からは、この3年間の分析期間中もデータ収集は継続したので、17年間で(兄からは8才から25才まで妹からは4才から22才まで)131のスピーキングデータ、ライティングデータは29となった。今回の科研費研究で約60%の正確さ・語彙・流暢さ・ナラティブ分析が完成した。妹のデータのうちで4才9ヶ月から19才1ヶ月までの19スピーキングデータを抽出して中間報告とする。日本在住でも出生後英語に絶えず接してきた結果、英語母語話者とほぼ同じ発達段階を英語力・ナラティブ力において示していた。但し、英語母語話者に見られない独自の誤りとナラティブも観察され、更に詳細なデータ分析が必要である。

研究成果の概要(英文)：This research examined two bilingual siblings. Both written and spoken data samples were collected from the brother (from age 8 to 25 years) and the sister (from 4 to 22) over a 14-year period. During the past three-year analysis period, the researchers continued to collect data samples, totaling a 17-year span with 131 speaking and 29 writing data samples. Approximately 60% of the analysis has now been completed including accuracy of the language used, the choice of vocabulary, fluency and quality of the narratives. A total of 19 data samples were examined, from the bilingual female subject from age 4 years to age 19 years, and are summarized here. Despite the subject undergoing primarily Japanese schooling, which means minimum exposure to English, due to constant English exposure in the home, she showed the same development patterns in narrative skills as English NS of the same age. There were some peculiar word choices in the narratives and additional analysis may be required.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・社会言語学

キーワード：ナラティブ バイリンガリズム 縦断研究 言語習得 発達段階 言語間距離

1. 研究開始当初の背景

2007年度から2010年度にかけて科研費研究の分担者として取り組んだ日英バイリンガルデータは、日英バイリンガル兄妹から14年間にわたり収集した縦断習得データであった。このデータのうちでオーラルスピーチに関して、(1)ポーズ分析等の流暢さ、(2)4-M(形態素の習得順を理論的に予測した Myers-Scotton, 2002 による)モデルを用いた正確さ、(3)関係詞の使用等 T-unit 中の複雑さ、(4)使用語彙レベル、の4視点から習得分析を行った。最終年度(2010.6)にその成果の一部を国際語用論学会で発表した際に、Bamberg 博士よりコメントがあり、非常に貴重な日英バイリンガル縦断習得データであり、しかも諸社会的・経済的変数の統制された兄妹からのデータであるので、言語学的分析に留まらずに認知発達を見るために収集データのナラティブ分析を提案された。ナラティブ分析で90年代からこの分野を牽引してきた Bamberg 博士が、幸いも2010年度3ヶ月間ではあるが日本に客員教授として滞在していたので、ナラティブ分析の手ほどきを実際に我々の収集したデータを用いて受けることができたので本研究に着手した。

2. 研究の目的

14年にわたる2早期(同時)バイリンガル兄妹から収集したストーリーテリングデータ・トーキングデータとライティングデータについて、Bamberg & Damrad (1991)により提唱されたナラティブ分析を行い、モノリンガルに比べ9歳以前は認知面の発達が早いとされるバイリンガルであるが(Bialystok, 2007)、日英バイリンガルではどのような発達を探る。モノリンガル対象のナラティブ比較研究は既に Slobin(1985)、バイリンガル対象には

Lanza(2001)など数は少ないが行われてきた。日本語モノリンガル対象のナラティブ分析を Kuntay and Nakamura (2004)は他言語モノリンガルとの比較研究をしたが、日英バイリンガルのナラティブ研究は僅かに南(2007)による横断研究があるのみである。つまり、早期日英バイリンガルの縦断研究はナラティブ分析に関して現在皆無の状況である。このナラティブ分析結果と言語面での分析結果と総合して、日本発の貴重な長期縦断バイリンガル研究として世界に発信するのを目的とした。

3. 研究の方法

日英バイリンガル兄妹から14年間にわたり収集した縦断習得データを言語面(前回の科研費研究で未分析データ)からとナラティブ面から分析を行った。言語面に関しては次の4視点からの分析を行った:(1)ポーズ分析等の流暢さ、(2)4-M(形態素の習得順を理論的に予測した Myers-Scotton, 2002 による)モデルを用いた正確さ、(3)関係詞の使用等 T-unit 中の複雑さ、(4)使用語彙レベル。

次にナラティブ面からは、Bruner (1986)が提案した landscape of action (ナラティブが時間の流れに沿って主部一貫して語られているか)と landscape of consciousness(各項目にたいして語り手の感情表現)の2観点を大枠として用いた。具体的には、Nippold (2006)が用いた story grammar を援用し、landscape of action 分析には、設定・エピソード・問題解決・結果の4項目、landscape of consciousness 分析には内面(感情)表現に着目した分析を行った。分析対象データのうちで、frog シリーズを用いたオーラルストーリーテリングタスクによるデータの分析では、8エピソード全てを分析対象とした。次に内面(感情)表現に関しては、Bamberg &

Damrad-Frye (1991)のモデルに従い、(1) frame of mind, (2) hedges, (3) negative qualifier, (4) character speech, (5) causal connectors に発話全語を範疇分けした。

4. 研究成果

(1)1年目：中間発表として、第8回国際バイリンガリズムシンポジウム(2011年6月ノルウェー・オスロ)で'Linguistic and narrative development in a Japanese-English bilingual's first language acquisition: a 14-year longitudinal case study'を発表し、更に同年8月には第16回世界応用言語学会(2011年8月中国・北京)でも'Japanese-English bilingual first language acquisition- two longitudinal studies'を発表した。バイリンガリズムと応用言語学分野で世界最高レベルのフィードバックを得ることができ、より質の高い研究成果をあげるために、研究2年目と3年目の分析予定量を増やす計画に予定を変更した。

(2)2年目：日英バイリンガル2人(一方は5歳8ヶ月~21歳2ヶ月で他方は9歳11ヶ月~24歳10ヶ月まで)から収集した縦断ストーリーテリングデータを2年に1つの割合で抽出し、ナラティブ分析と言語正確さ分析を行った。物語の設定部分と8プロット及び登場人物の感情表現に関するナラティブ分析の結果、両被験者ともに年齢とともにプロットは、英語モノリンガルやアルファベット言語間のバイリンガル対象先行研究同様、全て言及されるようになった。しかし、物語の面白さや深みを出す感情表現は年齢よりも個人差が大きい事も判明した。正確さ分析では、両バイリンガルとも15,6年間にわたり93%・96%以上の正解率であり、特に最終の2年間はMyers-Scottonによる4種類の形態素全てに

おいて99%以上の正解率を示していた。本年度の最大の成果は、バイリンガリズム研究で最も権威のある専門ジャーナルの1つであるinternational journal of bilingual education and bilingualismに、研究代表者と研究分担者の共著論文が掲載されて事である(Linguistic and narrative development in a Japanese-English bilingual's first language acquisition: a 14-year longitudinal case study, 15, 4, 475-508)

(3)3年目：バイリンガル兄妹からのデータの中で最終年度には以下の分析を行った。兄が9才から23才の間に収集した24スピーキングデータの正確さ分析(4-M形態素分析)19才から24才の間に収集した4スピーキングデータの正確さ分析・語彙分析・流暢性分析、19才から23才の間に収集した2ライティングデータの正確さ分析・語彙分析・ライティング力分析を行った。妹からは、5才~21才時に収集した40スピーキングデータの正確さ分析、及び4ライティングデータの正確さ分析・語彙分析・ライティング力分析を行った。更に16才から19才の間に収集した4スピーキングデータに関しては正確さ・語彙・流暢さ分析が完了した。

この兄妹からは14年間に渡り縦断データを収集し、その分析にこの3年間従事してきたが、分析期間中もデータ収集は継続し、17年間で(兄からは8才から25才まで妹からは4才から22才まで)131のスピーキングデータ、ライティングデータは29となった。正確さ分析とナラティブ分析には膨大な時間がかかるが、この3年間の分析(正確さ・語彙・流暢さ・ナラティブ分析)で約60%の分析が完成した。妹のデータのうちで4才9ヶ月から19才1ヶ月までの19スピーキングデータを抽出して、現時点での中間報告とする。日本の一条校での学習は必然的に英語接触量の低さに

繋がるが、出生後英語に絶えず接してきた結果、英語母語話者とほぼ同じ発達段階を英語力・ナラティブ力において示していた。但し、英語母語話者に見られない独自の誤りとナラティブも観察され、更に詳細なデータ分析が必要である。

今後の方向性としては、幸いにも今後4年間で残りのデータ分析を行う科研費研究が認められたので、言語面とナラティブ面から兄妹のデータ分析をライティングも含めて完了させる計画である。兄の発達段階と妹の発達段階をつぶさに見て、それぞれのケーススタディーとするとともに、社会経済的変数の統制がとれた2被験者の発達段階を比較する比較研究としてもまとめる予定である。

2014年度には世界用言語学会でこれまでの成果を発表することが既に決まっており、フィードバックをもとに、国際誌への投稿をするつもりである

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- (1) 田浦秀幸. (2013). 「機能的近赤外分光法(fNIRS)の原理とバイリンガル第1言語保持に関する4年間の縦断実験研究」立命館大学言語科学研究 Working Papers, 3, 13-34. (査読有り)
- (2) 清水つかさ・張旋・田浦秀幸. (2013). 「バイリンガル第1言語発達擬似縦断研究: 言語学的・脳イメージング技法を用いて」立命館大学言語科学研究 Working Papers, 3, 59-68. (査読有り)
- (3) Hideyuki Taura & Amanda Taura. (2012). Linguistic and narrative development in a Japanese-English bilingual's first language acquisition: an 14-year longitudinal case study. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 15, 4, 475-508. (査読有り)
- (4) 田浦秀幸. (2012). 「千里国際学園(一条校とインター併設校)でのバイリンガル教育からの示唆」立教大学英

語教育研究所研究成果報告書第4巻, 35-40. (査読無し)

[学会発表](計4件)

- (1) Hideyuki Taura & Amanda Taura. (2013). Language attrition through the two lenses of conventional and brain-imaging analyses. 9th International Symposium on Bilingualism (Singapore. June 10-13, 2013).
- (2) Hideyuki Taura & Amanda Taura. (2012). Effects of bilingual experiences on numeral and story-telling tasks: A preliminary neuroimaging (fNIRS) study. Association for the scientific study of consciousness 16 (Brighton, UK. June 4-5, 2012).
- (3) Hideyuki Taura & Amanda Taura. (2011). Japanese-English bilingual first language acquisition - two longitudinal studies. 16th World Congress of Applied Linguistics. (Beijin Foreign Studies University, Aug 26, 2011).
- (4) Amanda Taura & Hideyuki Taura. (2011). Narrative development in a Japanese bilingual. 8th International Symposium on Bilingualism (University of Oslo, June 16, 2011).

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等(該当無し)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

田浦 アマンダ (TAURA, Amanda)
摂南大学・外国語学部・准教授
研究者番号 : 60388642

(2)研究分担者

田浦 秀幸 (TAURA, Hideyuki)
立命館大学大学院・言語教育情報研究
科・教授
研究者番号 : 40313738

(3)連携研究者

該当者無し